Osaka University Knowledge Archive

Title	明治期の文芸作品における心霊学の影響 : 漱石・鴎外の文芸作品を中心に
Author(s)	荘, 千慧
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60059
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【10】

氏　　名	莊（そう）　千（せん）　慧（けい）（Chuang Chien-Hui）
博士の専攻分野の名称	博　士（文学）
学　位　記　番　号	第　２６０５３　号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**明治期の文芸作品における心霊学の影響** **―漱石・鷗外の文芸作品を中心に―**
論文審査委員	（主査） 教　授　出原　隆俊 （副査） 教　授　飯倉　洋一　　教　授　清水　康次

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、明治期における心霊学の流行が文芸作品に与えた影響の一端を、夏目漱石・森鷗外に関する考察を通して探るものである。明治に入ってから、超常現象などは神経のなせる技だとして、否定されてきた。しかし、三十年代の後半から心霊学が流行するようになる。漱石や鷗外の作品はそれらの流行の風潮の影響のみではなく、それぞれに特有の関心があったことを明らかにしようとする。

「第一部　夏目漱石における心霊学の受容」の「第一章　漱石における心霊学の受容―「哲学雑誌」を踏まえて―」では、漱石が編纂委員の一人であった「哲学雑誌」に、心霊研究がまだ流行していない明治２０年代の前半において、すでに心霊学関連の記事が多数見られることを指摘する。心霊研究に対する漱石の関心は、自身が明治２０年代後半に参禅したことや、イギリス留学中に心霊主義の著書を多数購読することとも繋がっている。この流れの根底に、漱石の人間存在の本質への探究という問題意識がある。それは明治３０・４０年代の人々にとっては一つのブームにすぎなかったものとは異質であった。

「第二章『琴のそら音』における＜自己＞―「法学士」の不安―」では、〈霊〉をめぐる時代性が描き出され、『文学論』で述べられた心理描写の手法も多用されているとする。本作は従来論じられてきたような、科学的な「常識」の落とし穴を示唆する風刺性の強い作品ではなく、主人公の心境変化のプロセスを描こうとしたものであり、漱石が関心を持った心霊現象に係わる問題を考察する際に見逃せない作品の一つであると指摘する。

「第三章　漱石の文芸観と心霊学」では、漱石の書簡・エッセイ・小説から、彼が〈霊〉に対して高い関心を示したことは明らかであり、彼の文芸観には、メーテルリンクなどの心霊研究者の著書の影響が窺えるとする。『行人』に描かれている一郎の苦悩の有り様と彼が考える自身を救う方法からも、心霊研究者の主張が漱石に与えた影響の強さは窺えると指摘する。

「第二部　明治４０年代の鷗外小説における＜怪異＞の捉え方―明治期の心霊学の流行との関連をめぐって―」は、鷗外は〈霊〉の存在に関心はあったものの、心霊学には強い関心を示していないことを指摘しつつも、鷗外がドイツの恐怖小説作家と似通った試みをしており、明治４０年代に一連の翻訳・創作小説を発表したが、その背景に、明治後期からの心霊学の流行の影響があるとする。

論文審査の結果の要旨

本論文は、漱石・鷗外という二人の作家と明治期における心霊学の流行との係わりの実態を解明するために、両者が摂取した外国の著作をはじめ、漱石については「哲学雑誌」、鷗外については「椋鳥通信」の実際を丹念に検討し、論の基盤とすることに努め、貴重な新見も提示している。様々なデータベースを縦横に活用し、所蔵書物への新たな照射や思いがけない事実の指摘も成果であると言えよう。こうした作業的な努力と、このようなテーマのもとに二人の作家を大きな枠組みでとらえようとする立論への強い意気込みは評価できる。一柳広孝など先行研究に追随するものとはいえ、明治３０年代の心霊学の流行が文学作品に大きな影響を及ぼしているという事実を明らかにしている点は成果である。論文全体がどのように評価されていくかということは今後の問題であるが、少なくとも検討の対象になりうることは否定できない。

一方で、調査の報告の仕方で、必要な手順を踏んでいないことによって読む者を混乱させ信頼感を損ねる印象も与える。引用の仕方・注の記述・年代の表記などに、配慮や細心の注意が欠けているところも散見する。また、このテーマで論じようとするあまり、扱う作品などがあたかも心霊学との関係がすべてであるかのように論じられているのは遺憾である。せっかくの成果が、この弱点のために相殺されかねない。

漱石における心霊学からの影響を継続的なものとしているだけで、心霊学に関わる事象がどのように捉えられ、描かれているのかが見極められていないため、漱石の意識の独自性や変化が見えてこないという弱点もある。また、第二章の「琴のそら音」など、心霊学に注目したことで何が新しく見えてきたのが明示できておらず、作品の再評価につながってこない。

鷗外の＜怪奇小説＞の位置づけは、従来の議論に安易にもたれ過ぎていて、心霊学の摂取という事実と作品内容の実際の間の乖離を不問に付している。

全体として、詳しい調査が、これまでの作品評価を変えたり、新たな読みを提示するまでには至っていないという批判を回避しきれない。

このように、本論文は、弱点を少なからず残していることは否定できない事実であり、より充実したものへと進化することが強く求められていると言えよう。今後のさらなる精進を強く期待し、本論文を博士（文学）の学位に認定できるものと判断する。